

	第4回	量的デザインリサーチ 2 デザインの評価やポジショニング分析に用いるコレスポネンス分析(対応分析)の理論と実践ノウハウを学び、演習によりその利点と限界を体得する。	—	対面
	第5回	消費者の選好構造分析 1 コンジョイント分析の理論と実践ノウハウを学び、簡易な演習によりコンジョイント分析の利欠点を体得する。	—	対面
	第6回	消費者の選好構造分析 2 構造方程式モデリングの概念とデザイン開発への応用方法を事例を通して学ぶ。	有	録画
	第7回	香りの選好調査とその応用 1 第7回～第13回で実施するグループワークの概要説明と、多変量解析法(対応分析法など)の復習を行う。なお、この演習は、ある化粧品会社で実際に行われたアンケートをモデルとしている。	—	対面
	第8回	香りの選好調査とその応用 2 グループワークの形式で、調査目的と質問票を設計する演習を行う。	—	対面
	第9回	香りの選好調査とその応用 3 質問票の講評をグループ単位で受け、実験計画(調査計画)の考え方をより深く学ぶ。	—	対面
	第10回	香りの選好調査とその応用 4 各グループが設計した質問票に他のグループの学生が回答する、という形式で、香りの選好調査(主観評価実験)を行う。	—	対面
	第11回	香りの選好調査とその応用 5 質問に対する回答(データ)を電子的に集計する方法について学ぶとともに、分析目的に応じたデータの前処理、構造化の方法をグループ単位で演習する。	—	対面
	第12回	香りの選好調査とその応用 6 収集したデータを多変量解析し、その結果を考察する演習をグループ単位で実施する。	—	対面
	第13回	香りの選好調査とその応用 7 調査の結果および考察を発表し、その内容を全体で講評する。また、調査結果をレポートとしてまとめる演習を行う。	—	対面
	第14回	感性評価に個人差が与える影響 心理計測と生理計測を併用した多面的測定方法の研究事例を通して学ぶ。	有	録画
	第15回	デザインリサーチの新潮流 デザイン領域拡大に伴うデザインリサーチの新潮流(デザインディスコースなど)、および、その他の手法・ツールの概要を学び、発展的な学修の手掛かりを得る。	有	録画
	試験	試験 デザインリサーチに関する筆記試験	—	対面
成績評価	次の3つのポイントで評価する(合計100点満点) ・第2回～第6回で実施する授業の際に重要ポイントを記述する講義レポート:30点 ・第7回～第13回で実施するグループワークの活動と調査レポート:20点 ・試験:50点			
教科書・教材	各回講義の際にテキスト、資料などを配布する。			
参考図書	<ul style="list-style-type: none"> ・入門多変量解析の実際 第2版(朝野熙彦) ・意味論的転回(クラウスクリップENDORF) ・エンジニアリングデザイン(ナイジェルクロス) ・複雑さに挑む科学—多変量解析入門(ブルーボックス) ・商品開発と感性(感性工学シリーズ1) ・マーケティングリサーチの論理と技法 ・西里静彦、データ解析への洞察:数量化の存在理由、関西学院大学出版会、2007(第7回～第13回) 			
獲得可能なコンピテンシー		獲得可能度合 (◎ ○ △ -)	獲得可能な内容	
メ タ	コミュニケーション	○	デザインリサーチのためのグループワーク体験	
	継続的学修・研究	○	デザインディスコースなど最新のデザインリサーチの潮流を学ぶ	
	チーム活動	○	デザインリサーチのためのグループワーク体験	
コ ア	発想力	○	デザインリサーチの結果を読み解き、本質的な課題解決に挑む発想力の獲得	
	表現力	—		
	設計力	—		
	開発力	—		
	分析力	◎	多変量解析などを利用したデザイン分析手法の修得	

専攻名	創造技術専攻	必修・選択	必修	単位	6	学期	1-2Q
科目群	事業アーキテクチャ特別演習	科目名	事業アーキテクチャ特別演習 b1			教員名	池本、國澤、越水、吉田
		(英文表記)	Advanced Exercises: Business Architecture b1				

概要	<p>1 年次では、知識とスキルを修得するが、これだけでは事業開発型の高度専門職人材（事業アーキテクト）として活躍することはできない。実際の業務を成功に導くためには、経験及び業務遂行能力（コンピテンシー）が不可欠である。当科目では、事業アーキテクト養成の最終段階として、成長領域の現状から問題を特定し、現実の課題に対する問題解決・事業開発のプロジェクトを実行する。実際の業務に近いプロジェクトを体験することで、知識・スキルの活用経験を蓄積し、さらにコンピテンシーを修得するために PBL（Project Based Learning）型の演習授業を行う。</p> <p>各プロジェクトの内容は別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照のこと。</p>
目的・狙い	<p>当科目の履修段階では、以下の知識・スキル・経験等を有していることが想定・期待される。</p> <p>(1) 本学修学前から既に有している知識・スキル・経験 (2) 講義・演習型科目（1 年次）で修得した事業アーキテクトとしての知識・スキルと対象領域の現状・課題等 (3) 事例研究型科目で学んだ事業開発手法（事例研究・事業設計）</p> <p>これらの知識・スキル・経験等を活用・駆使して、PBL 型のプロジェクト演習を行うことで、事業開発型の高度専門職人材に期待される経験及び業務遂行能力（コンピテンシー）を修得する。各自が有している知識・スキル・経験は以下を想定している。</p> <p>修得できるコンピテンシー（別途設ける評価法（5 段階評価）でレベル 4 以上）：</p> <p>(B1) コミュニケーション能力 (B2) 継続的学修と研究の能力 (B3) チーム活動 (B4) 発想力 (B5) 表現力 (B6) 設計力 (B7) 開発力 (B8) 分析力</p>
前提知識 (履修条件)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 22 単位以上（ただし、10 月入学で翌年当科目を履修する学生は 12 単位以上）を取得していること。 PBL 履修期間は PBL 活動に専念することが期待され、並行して講義・演習型科目を履修すべきでは無い。修了要件を満足できるようにあらかじめ必要単位（28 単位）を取得することが推奨される。 ・ 事業アーキテクトコースの推奨科目を 5 科目以上単位取得済みであること。 コース推奨科目のうち 3 科目以上は成績評価 4 以上が期待される。 ・ プロジェクト配属ルール及び履修条件の詳細は、別途配布する「PBL プロジェクト説明書」、1 月に開催される「PBL 説明会」を参照すること。
到達目標	<p>上位到達目標</p> <p>問題解決・事業開発の提案から遂行に関する各種の業務を牽引することができ、また関係者を指導することができるレベル。「PBL プロジェクト説明書」でのプロジェクトごとのコンピテンシーの評価基準で概ね 4 以上（80 点以上）の評価を受ける。</p>
	<p>最低到達目標</p> <p>問題解決・事業開発の提案から遂行に関する各種の業務を適切に実行できるレベル。「PBL プロジェクト説明書」でのプロジェクトごとのコンピテンシーの評価基準で概ね 2 以上（60 点以上）の評価を受ける。</p>
授業の形態	<p>別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照のこと。学生自ら場所及び時間を決め、活動する。原則、フェイスツーフェイスでの活動であるが、必要であれば遠隔会議システム等のオンラインコミュニケーションでの活動を行うことがある。</p>
授業外の学習	<p>別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照のこと。</p> <p>原則として週に 9 時間以上の大学での授業活動のほかに、9 時間の授業外活動を 16 週間以上継続すること。授業外活動では、授業活動に必要な事前学修、またメンバーに分担された活動中の課題作業（調査、プログラミング、ドキュメント作成等）を行う。</p>
授業の内容	<p>原則として、週に 9 時間以上、16 週間以上の活動を計画的に行う。</p> <p>また、月 1 回の教員報告、週 1 回の週報（週間活動報告）提出、学期ごとの SA（Self-Assessment）提出を適切に行うこと。詳細は、別途配布する「PBL プロジェクト説明書」、4 月に開催される「PBL ガイダンス」を参照のこと。</p>

成績評価	<p>PBLの成績評価は、成果、SA、週報、活動実績、年間活動報告書等を参照し、PBLの活動及び成果に対する関与度及び貢献度による評価（各30点、合計60点満点）と、コンピテンシースコアシートによる教員評価と相互評価に基づくコンピテンシー獲得度の評価（40点満点）から総合的に評価する。</p> <p>最終評価は、主担当教員と、2人の副担当教員で成績案を作成し、全教員によるPBL成績判定会議で審議し確定する。</p> <p>前者はPBL活動を評価するもので、後者は獲得したコンピテンシーという汎用能力の評価を行うものである。</p> <p>詳細は「PBLプロジェクト説明書」を参照のこと。</p> <p>なお、プロジェクトは1年間通して行うが、成績・単位は半期（前期・後期）ごとに付ける。</p>		
教科書・教材	別途配布する「PBLプロジェクト説明書」を参照のこと。		
参考図書	別途配布する「PBLプロジェクト説明書」を参照のこと。		
獲得可能なコンピテンシー		獲得可能度合 (◎ ○ △ -)	獲得可能な内容
メ タ	コミュニケーション能力	◎	
	継続的学修と研究の能力	◎	
	チーム活動	◎	
コ ア	発想力	◎	
	表現力	◎	
	設計力	◎	
	開発力	◎	
	分析力	◎	

専攻名	創造技術専攻	必修・選択	必修	単位	6	学期	3-4Q
科目群	事業アーキテクチャ特別演習	科目名	事業アーキテクチャ特別演習 b2			教員名	池本、國澤、越水、吉田
		(英文表記)	Advanced Exercises: Business Architecture b2				

概要	<p>1 年次では、知識とスキルを修得するが、これだけでは事業開発型の高度専門職人材（事業アーキテクト）として活躍することはできない。実際の業務を成功に導くためには、経験及び業務遂行能力（コンピテンシー）が不可欠である。当科目では、事業アーキテクト養成の最終段階として、成長領域の現状から問題を特定し、現実の課題に対する問題解決・事業開発のプロジェクトを実行する。実際の業務に近いプロジェクトを体験することで、知識・スキルの活用経験を蓄積し、さらにコンピテンシーを修得するために PBL（Project Based Learning）型の演習授業を行う。前期の PBL 活動での知識・スキル・経験を活かし、次の段階への改善・発展を行う。</p> <p>各プロジェクトの内容は別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照のこと。</p>
目的・狙い	<p>当科目の履修段階では、以下の知識・スキル・経験等を有していることが想定・期待される。</p> <p>(1) 本学修学前から既に有している知識・スキル・経験 (2) 講義・演習型科目（1 年次）で修得した事業アーキテクトとしての知識・スキルと対象領域の現状・課題等 (3) 事例研究型科目で学んだ事業開発手法（事例研究・事業設計）</p> <p>これらの知識・スキル・経験等を活用・駆使して、PBL 型のプロジェクト演習を行うことで、事業開発型の高度専門職人材に期待される経験及び業務遂行能力（コンピテンシー）を修得する。各自が有している知識・スキル・経験は以下を想定している。</p> <p>修得できるコンピテンシー（別途設ける評価法（5 段階評価）でレベル 4 以上）：</p> <p>(B1) コミュニケーション能力 (B2) 継続的学修と研究の能力 (B3) チーム活動 (B4) 発想力 (B5) 表現力 (B6) 設計力 (B7) 開発力 (B8) 分析力</p>
前提知識 (履修条件)	事業アーキテクチャ特別演習 b1 の単位を取得していること。
到達目標	<p>上位到達目標</p> <p>問題解決・事業開発の提案から遂行に関する各種の業務を牽引することができ、また関係者を指導することができるレベル。「PBL プロジェクト説明書」でのプロジェクトごとのコンピテンシーの評価基準で概ね 4 以上（80 点以上）の評価を受ける。</p>
	<p>最低到達目標</p> <p>問題解決・事業開発の提案から遂行に関する各種の業務を適切に実行できるレベル。「PBL プロジェクト説明書」でのプロジェクトごとのコンピテンシーの評価基準で概ね 2 以上（60 点以上）の評価を受ける。</p>
授業の形態	別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照のこと。学生自ら場所及び時間を決め、活動する。原則、フェイスツーフェイスでの活動であるが、必要であれば遠隔会議システム等のオンラインコミュニケーションでの活動を行うことがある。
授業外の学習	<p>別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照のこと。</p> <p>原則として週に 9 時間以上の大学での授業活動のほかに、9 時間の授業外活動を 16 週間以上継続すること。授業外活動では、授業活動に必要な事前学修、またメンバーに分担された活動中の課題作業（調査、プログラミング、ドキュメント作成等）を行う。</p>
授業の内容	<p>原則として、週に 9 時間以上、16 週間以上の活動を計画的に行う。</p> <p>また、月 1 回の教員報告、週 1 回の週報（週間活動報告）提出、学期ごとの SA（Self-Assessment）提出を適切に行うこと。詳細は、別途配布する「PBL プロジェクト説明書」、4 月に開催される「PBL ガイダンス」を参照のこと。</p>